

のはアンティークショップとしてひとくくりになって地図化され、人々に西荻窪はアンティークの街だという印象を植え付けることにある。また様々なジャンルのお店をマップに掲載しておくことで、より広い客層にアプローチすることができる。

西荻窪にはアンティーク以外の魅力もある。幸いにも戦災を免れたため、今でも昭和の面影を残している場所がある。タウン誌では、アンティークショップで物色しつつ、昭和の雰囲気を楽しみ、おいしいご飯を食べて帰るという散策コースを頻繁に提案している。

そして西荻窪を愛するのアンティークショップ店主たちによる街おこしでもあるのだ。

ソウル市における教育環境と住居移動との関係：陽川区木洞を事例に

野崎 美智子

韓国、ソウルには教育的に好まれる地域が存在し、人々は教育目的でその地域へ移動するという現象がある。これは日本ではみられない、興味深い現象である。本研究では、ソウルにおいて教育的に好まれる地域が発生し、人々がそこへ集まっていき、その結果、地域イメージが新たに形成されるという現象について、韓国における教育と住居、不動産との関係から論じた。

これまで、教育的に好まれる地域として江南地域を対象とする研究がほとんどであったが、本研究では陽川区木洞を対象地域とし、その場所形成から教育的に好まれる地域として吸引力を持つに至る過程を明らかにした。

前提として、韓国の教育や不動産制度について触れ、高等教育制度と教育熱という韓国独特の要素の上に、不動産制度と住居移動の相互関係が相まって、ソウルにおいて教育的に好まれる地域が形成され、人々がそこへ集まってくることを示し

た。ここでは文献調査を主に行い、統計データの分析も多少取り入れて考察した。

このソウルにおける現象を念頭に置きながら、本研究の対象地域である木洞が教育的に好まれる地域として場所性を持つようになった背景を考察した。ここでは1980年代に行われた新市街地開発に至る歴史的背景や開発の過程を追いながら、木洞新市街地の場所形成について述べた。その上で、木洞において教育特区という場所イメージが形成され、それに伴って不動産価格の上昇が起きていることを、雑誌記事や統計データの分析を通して示し、これを木洞の吸引力とした。

また、ソウル市で起こっている居住地分離が陽川区内の新市街地地域においてみられることにも言及した。これより、木洞の吸引力と居住地分離が、教育的に好まれる地域としての木洞独自の場所性を形成することが明らかとなった。

カナダ・ビクトリアに集まる日本の若者たち：ESL生のステイ先選択

藤田 朋代

本論文は、近年の日本の若者たちを中心にみられる第二言語としての英語習得（ESL：English as a Second Language）のために海外渡航をするという新しい社会現象に顕著な一都市への集中を、カナダ、ビクトリアを事例として分析する。日本人ESL生の一都市への集中を考える上で、その要因を日本側に存在するものとホスト国側に存在するものにそれぞれ分類し、その要因が実際にどのようにこの社会現象に影響しているのかを考える。

はじめに日本社会、日本の教育の中での英語のニーズおよび日本社会のストレスからの脱出法としてESLの拡大を取り上げる。次に、その受け入れ先であるカナダおよびビクトリアの地理的好条件と日本との外交関係、観光政策にみられる日本人を引き付ける要因について論じ、論文の後半

部では、両国の間で ESL 増加促進に大きく関わっている留学エージェントの存在について考察を加える。留学エージェントの働きおよびそのタイプ、さらに聞き取りによる実際のデータをもとに、各個人がステイ先を決定する際の留学エージェントたちの影響を明らかにしていく。論文の最後では、実際にビクトリアに滞在し、その期間に現地の語学学校に通学した経験のある 20 代の日本人男女を対象にしたインタビューの結果を分析し、それまでに述べてきたそれぞれの要因とエージェントの働きが本当にビクトリアに滞在している ESL 生たちのステイ先選択に反映されているのかを検証する。

1980 年代中盤以降の「下町」地域における街並みの変容：

＜働くまち＞から＜住むまち＞へ

牧野 彩

本研究では、東京都の江東地域、なかでも江東区の白河地区を事例に、1980 年代中盤以降の「下町」地域における街並みの変化を明らかにし、街並みの変化が街に与えたインパクトについて考察した。

その結果、白河地区に多く立地していた専用工場や倉庫・運輸関係施設は民間の大手ディベロッパーが供給する大規模マンションへと変化していった。これらの大規模マンションは、その間取り、専有面積、分譲価格などから、ファミリー層をターゲットとしていることが明らかになった。そこで白河地区における住民構成を分析したところ、最近 10 年間に於いて住民構成に大きな変化が確認された。白河地区では近年、ブルーカラー層からホワイトカラー層への職業階層の入れ替えがみられた。白河地区にみられるホワイトカラー層の特徴は、年齢が 20～44 歳の核家族で、就業者の多くはサービス業などの第三次産業に従事し

ていた。

住民構成の変化によって、地域商業やサービス機能にも変化がみられるようになった。住商併用施設や住居併用工場の跡に建てられた複合ビルの 1 階には、以前この地区にはみられなかったような業種の店舗が入居しており、これらは先述したホワイトカラー層をターゲットにしたものと考えられた。この点に、白河地区ではジェントリフィケーションの兆候が認められる。

以上のように、「下町」地域の街並みが変化した要因には、産業構造の転換、地域の形成史、交通利便性の向上が指摘され、「生産」の役割を持つ＜働くまち＞であった「下町」地域は、最近 10 年間で「消費」の役割を持つ＜住むまち＞へと大きく変貌したのである。

しかし、20 年・30 年先の「下町」地域の街並みは現在と同じ様相を呈してはいないだろう。建物の老朽化や高齢化、ニーズの変化にあわせた大型小売店の撤退、定住意識、経済の動向など、今後の「下町」地域の街並みを変化させる可能性を持つ事由は多く存在する。

変化する雪国の生活：

屋根雪処理法の発展が生み出す新たな事故

松田 明子

時代とともに、雪国では、進歩する技術を駆使してさまざまな除雪法が開発されてきた。特に屋根の雪下ろしの苦勞から解放されようと、雪国の屋根は、自然落下方式や、融雪方式などさまざまな屋根雪処理法が考案され、普及している。雪国の住居の屋根や家の周りは、雪のない、昔と異なる空間が出来ている。

昔に比べ雪処理は楽になったが、除雪中に起きる事故はなくなり、昔は無かったタイプの事故が増えている。これは、雪国の一見便利になった住宅構造が原因となっているのではないか。